

谷崎潤一郎について

——「細雪」からみた谷崎の女性観——

青 山 伸 枝

目 次

はじめに

第一章 生いたち

第一節 小さな文豪

第二節 青春時代

第二章 結 婚

第一節 小田原事件まで

第二節 妻君讓渡事件

第三節 松子との出逢い

第三章 「細雪」について

第一節 作品成立の背後

第二節 花は桜 ——古典美の追求——

第三節 四姉妹

第四章 谷崎の女性観

おわりに

はじめに

「細雪」——この言葉を初めて耳にした時、なぜかとても清らかで繊細で、それでいて宮びやかな情景が、目前に浮んだ事を覚えている。それは、あたかも、風流びた装いに身を包み、しなやかな匂いをさせた、女性の代名詞であるかのように感じられたのである。この初めての印象が、私を、谷崎潤一郎という一人の文豪を見つめさせるきっかけとなった。

谷崎はその一生を、実生活、社会生活の上で、あらゆる犠牲を払ってまでも、頑固に我を通して続けたという。その理想を追い求めるといふ姿勢は、作品に対しても、女性（妻）に対しても、又自分に対しても狂的と言ってよい程厳しいものであった。

しかし、そうまでして彼が追い求めたものは何だったのであろう。彼が、社会生活を営む上でも、最終的に辿り着く所のものは、『美』であり、具体的には『女性』であった。

それは、彼を生んだ母親の影響が多分にあるとも言われている。「細雪」という作品は、谷崎にとって、熱情と野心をもって追求し続けた『美』に一区切をつけ、違った角度から『美』を求め出した最初のものではなかっただろうか。彼は、数多くの作品を残しているが、これ以前の作品には、解放的で貪欲的に美を表現したのに対し、この頃からは、極めて緻密で完成された美を感じさせているように思う。

この変化の奥に存在する同一のもの、つまり、彼の考える『美の極致』にあてはまる女性像とは、一体どういふものなのであろうか。谷崎の我を通した生涯と、作品「細雪」を深く見つめながら、彼の美に対する意識と、彼の女性観なるものを、とりあげて見ていこうと思う。

第一章 生いたち

第一節 小さな文豪

谷崎潤一郎が生まれたのは、明治十九年（一八八六年）であった。この年に文学界では言文一致運動がおこっている。暑い盛りの七月二十四日に、東京市日本橋区（現、東京都中央区日本橋）蛸殻町二丁目一四番地で、元氣な産声をあげたのであった。

彼の祖父は、谷崎久右衛門といい、仲々の商売上手で、一代で産を作り、家を興した人物である。責任感が強いことと、維新後の文明開化の時代に即応した、ハイカラな新商売を取り入れようとする、進取的な面が、彼をそこまで成し得たのであろう。

久右衛門には七人の子供がいて、上三人が女で、下四人が男であった。四人の男の子は、一番上を除いて養子に出している。三番目

の女の子は関せきといい、三人の中でも、とりわけ美人の子であったという。この関こそが、谷崎の思想から離れ得ぬ、母なのである。

関は、倉五郎という養子を取り、分家して父の商売を譲ってもらっていたが、繁盛も東の間、次第に貧窮に落ち入っていた。この商売が、繁栄していた時代に、谷崎は幼少時代を送った為、裕福な家庭の長男として、温く、贅沢に、我侪一杯に育てられた。そのせいか、家を一步外に出ると、人と口もきけない位、人並はずれた内弁慶になり、登校拒否の為か、小学校一年で落第している。

幼い頃の彼を知るのに、ばあやによく、「うーちのなあかの蛤はまぐり貝、外へ出ちゃ蜆しじみ貝」とからかわれたという逸話がある。

しかし、次の年には、先生が代わったこともあって、勉強も首席の成績をとる様になり、この小学校を卒業するまでの八年間に出逢った先生と親友が、彼を文学の道に誘い込んだ、最大のきっかけとなった。

谷崎自身も、この稲葉先生のことを、「多分私の全生涯を通じ、凡そ師と名づくべき人々のうちで此の人以上に私に強い影響を与えた先生はない」とまで言っている。

明治三十四年、数え年十六歳になった時、家の経済状態が益々悪化し、中学入学もできない状態であった。しかし、先生や親戚の配慮で、東京府立一中（現在の日比谷高校）に入学する事が出来た。彼は一年遅れていたのだが、飛び抜けた秀才であったので、二年を飛ばして、一気に三年生へと進学できたのである。

谷崎の家系において、父方をみても、母方をみても、このように文才に秀でた者は、潤一郎と、その弟の精二にしかみられなかった。明治の女流作家として名高い、樋口一葉のように、家柄や、父の才

能を受け継いで、文学の道に入ってきたわけではなかった。作家として、彼をこの世に押し出したのは、彼の、極めて強い好気心と、鋭敏な感受性と、絶ゆまぬ努力に因るものであった。

将来の文豪としての芽を出し始めたのは、わずか十歳の頃からである。その頃、近所の小学生が寄り集まって、月に一回発行する『学生倶楽部』という回覧雑誌があった。谷崎は、明治三十一年の四月号に、初めて、歴史と雑録と図画を掲載している。それも、一人前に「花月」というペンネームまで添えて、我ながらの得意顔だったのだらう。

そして、府立一中に入ってから、『学友会雑誌』というのに、次々と文章を発表している。その中で、三十五号に発表した、「牧童」という漢詩がある。

牧童

牧笛声中春日斜ナリ

青山一半入紅霞ニ

行人借問歸何処ニ

笑指梅花溪上家

「牧童が笛を吹いている。のどかな春の日も暮れて、日ざしも斜めになった。新緑で青々とした山は、その半分ほどがまっかか染まっている。たまたま通りかかった旅人が、『おまえはどこに帰るのか』と牧童に問いかけてみると、牧童はだまって笑いながら、谷川の上流にある、梅の花が咲いた家を指さした。」（「谷崎潤一郎」清水書院より）

この、見事な漢詩を、まだ十六歳の中学一年生が書きあげたことはいくらでもない。まさに、堂々たる「小さな文豪」であったのだ

らう。

そして、彼の作中に見られる「花」という文字に、私は注目したい。「花」に対する彼の直感的な官能に、幼いながらも「美」を強く意識した面がうかがえる。それはやがて、花と言えば桜につながり、日本の伝統美への追求となっていったのである。

人間の美に対する感覚は、まさに、生まれながらに存在していると言えよう。

第二節 青春時代

明治三十五年、十七歳。谷崎が府立一中時代に、家計は益々窮迫し、中途退学をしなければならぬ状態に落ち入った。その時、又ある先生が、彼の才能を惜しんで、住み込みの家庭教師の口を世話してくれたのである。こういう身の周りの世話をしてくれる、恩師や友の暖い心配りが、どんなに陰で彼を支えていたことであろう。

その家は、築地の精養軒という料理屋で、主人は北村という人であった。彼は、この家から中学に通い、そして卒業し、明治三十八年、二〇歳の時、第一高等学校の英法科に入学させてもらった。

一高の二年の終り頃、谷崎はそこで初めての恋をした。北村家の遠い親戚で、そこで小間使いをしている、福子という女性が好きになってしまったのである。しかし、彼女に送った手紙が見つかってしまい、この年の六月三年生に進級する前に、彼は北村家を追い出されてしまった。後に彼は、この初恋を題材にして、『羹』という作品を書いている。

この失恋をきっかけとして、彼は、はっきりと文学の道を志し、英法科から英文科に転じたのである。

明治四十一年、二十三歳。伯父久兵衛と親友の笹沼源之助らの学資援助のおかげで、一高を無事卒業し、彼は、東大の国文科に入学した。しかし、この頃の彼は、一高時代に文芸部で活躍し、意欲満々で作品を発表していた彼とは、かなり違っていた。それは、当時の自然主義の流行の為である。明治四〇年に書かれた、田山花袋の『蒲団』を始め、正宗白鳥、島崎藤村、国木田独步などによって主張された自然主義の風潮が、彼にはどうしても受け入れられなかったのである。この事を、伊藤整氏は次のように評論の中で述べている。「その生来の敏感さ、その生活の窮迫、またちやうど自然主義文学の隆興期に当たっていた文壇の風潮に追随することのできない芸術上の好みなどが、内攻的に彼を苦しめ、それは彼の生涯の最も暗い時期であった」と。

彼の文学に求めるものは、現実をそのままあてはめたような、写実的なものではなく、作品の中に、もっと夢や幻想を含んだものではないければならなかったのである。

それにしても、圧倒的な自然主義の流れには少しも目を向けず、ただひたすら時代に立ち向い、自分の意志を貫いた姿勢に、彼自身人間としての魅力というか、大きな存在感を感じる。

彼の、決して濁流に押し流されない生き方は、もう既に始まっていたのである。

第二章 結 婚

第一節 小田原事件まで

大正三年、二十八歳の谷崎は、家では仕事がかどらず、向島の芸者、お初という女性のもとに通い、そこで主に原稿を書くように

なった。お初は、鉄火肌で妖艶なタイプの子であり、当時、悪魔主義と騒がれていた谷崎は、一目で気に入ってしまった。しかし、お初は既に結婚していたので、彼の気持ちを受け入れることはなかった。そこで、お初の妹である、千代子が紹介されることになった。千代子は、前橋市出身で、以前は、姉と同様芸者をしていたことがあり、一度、結婚もしている。しかし、夫と死別して一人いでいるところで、谷崎にめぐり逢ったのであった。

谷崎の方は、お初のこととは諦めるつもりでいたし、妹でも同じようなタイプであろうと安易に決めてしまい、つきあうこともなく結婚してしまった。この時、大正四年五月、谷崎潤一郎三十歳、石川千代子二十歳であった。

しかし、この性急な決断が、彼の人生において、最初の大きな失敗だったのである。失敗とは言っても、これは、芸術家たる谷崎の場合にだけ限ることであって、一般世間の普通の男性にとつてみれば、千代子は、実に貞淑で、従順で、家庭的な女性であった。いわゆる、最も「妻」らしい妻であったのだが、彼にとつて、ただの妻だけでは何の魅力もない俗女と等しい存在であったらしい。

結婚した翌年、潤一郎の血を引く唯一の子供である、鮎子が生まれたが、やがて、彼は千代子と口もきかなくなってしまった。普通子供でも生まれたら、その愛らしさに魅かれて、家庭を大事にしようとするものだが、彼の、絶大なる享楽主義は、そんな事くらいで妥協できるものではなかった。

彼は、千代子の純な氣質を全く認めないわけではなかった。谷崎自身が、後に千代子と離婚し、友人の佐藤春夫に妻を譲ってから書いたという、『佐藤春夫に与えて過去半生を語る書』の中で、こう

言っている。

僕には彼女の存在が一つの悲しい音楽になったのだ。僕が彼女をいよいよ疎んずるようになったのは、こんなところにも原因があるかもしれない。なぜなら、色彩の強烈な、陰翳のない華麗な文学を志していたあの頃には、彼女の奏でる悲しい音楽が、一実にたわいもなく単純なくせに、へんに涙を催させるその調べが、――甚だ禁物だったからだ。僕は彼女には腹を立てないが、この音楽には腹を立てた。時にはそれに打ち負かされる自分を忌ま忌ましく感じた。

享楽を追求し、大胆で、妖艶的な作品を書いていた彼にしてみれば、家庭においても、そんな雰囲気が欲しかったわけで、所帯じみた面が作品の中に映ってしまうことを、恐れていたのではないだろうか。

やがて、谷崎は、千代子に冷たくする代りに、その妹のせい子に、女の魅力を感じるようになり、自分の理想にかなう女性に育てようとした。まるで、『源氏物語』の中で、光源氏が紫上を育てるのと同じように。

そんな自分勝手な生活をしているうちに、母、せきが亡くなった。谷崎にとって関は、母というより、「永遠の女性」なる存在であった。彼女のこの上ない美貌と、少女のような性格は、谷崎に、母親への愛情だけでなく恋人への情みいたいなものまでうえつけてしまったのである。これは、彼の女性観に影響する最大のものである。彼女は、大正六年、五十四歳の若さでこの世を去っていった。

大正七年になって、谷崎はせい子と同棲するようになったが、彼の思う以上に、自由で奔放な女になっていたせい子は、谷崎に愛想

がつき、勝手に他の男のもとへ飛んでいってしまった。

彼は後に（大正十三〜四年）これを題材に『痴人の愛』を書き、作中で、讓次がナオミを教育して、一人の妖婦に仕立てようと試みるというナオミは、まさにこのせい子がモデルであった。

その頃、谷崎の友人で、家にも度々訪れていた、佐藤春夫という男があった。佐藤は、不幸な千代子を見るにつけ、同情の気持ちを抱いていたが、次第にそれは、思慕の情と変わっていった。千代子も、冷酷な夫と比べ、優しくいたわってくれる佐藤を好きになっていったのだが、当時、妻側から離婚を申し立てるのは、大変めずらしい事であったので、仲々思い切って言うことができずいた。

現在の離婚の大半は、女性側から要求するという状態に比べると、何て女性不遇な時代かと思うが、これも、今ののように、男性と同等の仕事を持つ女性がないに等しく、経済的に男性に頼っていた為、自然に女性の立ち場が弱くなったと言えるのではないだろうか。

大正九年、せい子と活動写真に明け暮れていた谷崎は、佐藤と千代子の結婚を認めた。

しかし、せい子が他の男のもとへ走ってしまった為、急に孤独感に恐われた彼は、翌年の三月になって、決断を翻し、千代子とは離婚しないと言いだしたのである。そこで、彼と佐藤とは、以後五年半にわたって絶交状態が続く。これまでの成り行きから、絶交までを、小田原の住まいで起こった為、俗に、小田原事件とよんでいる。

その後、谷崎一家は、横浜で暮らすようになり、西洋趣味的な作品を書いたり、戯曲に精を出す一方、夫婦間の問題は、一向に解決

に向かないままながら、家族旅行をしたりして、谷崎にしてはめずらしい、一時の平安な日々であった。

第二節 妻君讓渡事件

大正十二年九月。関東大震災が起った。母ゆずりの地震嫌いな彼にとって、生涯でこんなに恐ろしい事はなかったと言っている。

何とか一命をとりとめた彼は、地震騒ぎが落着くまでという、気軽な気持ちで、以前遊びに来たことのある関西へ、家族を連れて移ったのだが、この関西への移住が、彼にとって大きな転機となった。

これ以後、彼は、死に至るまで、遂に東京の地を再び踏む事はなかったのである。文学の面においても、これをきっかけに、悪魔主義から古典主義へ、西洋趣味から東洋趣味へと、鮮やかな変貌をとげている。

この転機をきっかけとして、昭和五年、『まんじ卍』と『まじ藜喰ふ虫』を書き、それを終えた頃谷崎は佐藤との交友を再びとり戻した。そして、千代子との離婚を決心し、妻を春夫に譲ることを決めた。長かった沈黙の日々に、到頭自ら終止符を打ったのである。

佐藤は、タミという女と結婚していたが、夫婦仲がうまくゆかず別れていた。谷崎の一人娘の鮎子も、佐藤にはなついていたので、大した問題もなく事は運ばれていったのである。

そして、その年の五月、世の中を騒がせたという、離婚報告の挨拶状が発表された。

拜啓 炎暑の候尊堂益々御清栄奉賀候 陳者我等三人この度合議をもつて千代は潤一郎と離別致し春夫と結婚致す事と相成潤一

郎娘鮎子は母と同居可致素より双方交際の儀は従前の通りにつき右御諒承の上一層の御厚誼を賜度くいづれ相当仲人を立て御披露に可及候へ共不取敢以寸楮御通知申上候 敬具

昭和五年八月

谷崎潤一郎

千代

佐藤 春夫

尚小生は当分旅行可致不在中留守宅は春夫一家に託し候間この旨申添候 谷崎潤一郎

この時、谷崎四十五歳、佐藤三十九歳、千代子三十五歳であった。この報道を知った世間は、まるで千代子の浮気の為に、谷崎が別れる決意をしたように受けとめ、千代子にかなりの非難をあげたという。

これが、いわゆる「妻君讓渡事件」の経過であるが、事件の解決に至るまでの心理的な描写を、谷崎も春夫も作品に書いている。谷崎は『神と人との間』春夫は『この三つのもの』である。

第三節 松子との出逢い

昭和六年、離婚した翌年の四月、谷崎は、自分が世話をして、文芸春秋社の記者となった古川丁未子とみこと結婚した。彼よりも二十一歳も若い、英文科出の近代的なインテリ女性であった。

しかし、又、ここで彼は選択の失敗を犯したのである。彼は、芸術生活と実生活が一体となる家庭を夢みていた。初期の悪魔主義といわれた時代には、妖艶な女性が理想であったが、貞淑な千代子と結婚した為に、不幸な夫婦生活の悲劇を招いた。そして、優雅で、古典的な東洋趣味の世界へ転じた今、彼に最も必要な女性は、古典

的な教養もあり、宮びな気品の漂う人でなければならなかった。

この結婚は、当然の如く、三年目にあたる昭和八年、協議離婚の形式をとって終わった。

谷崎が、丁未子を選んだ理由の一つとして伊藤整氏の評論の中に「丁未子の美しさが、根津松子に似ていたから」というのがある。

この根津松子というのが、最終的に谷崎が選んだ女性、つまりは「美の極致」に相当する女性であった。

この松子というのは、丁未子と結婚する前からの、芥川龍之介を通じての知り会いで、当時大阪で十指のうちに入ると言われた大きな木綿問屋根津清太郎の妻であり、実家は、伝統ある藤永田造船所の大株主であった。何ひとつ不自由のない船場育ちのせいか、教養と美貌を兼ね、優雅さと宮びやかさに満ちあふれた、谷崎の理想にぴったりの女性であった。

谷崎は、かねてから密かに松子のことを慕っていたのだが、人妻ではあるし、高嶺の花だと思っただけで諦めていたのだった。しかし、彼が丁未子と離婚する頃になって、根津夫婦の間にも危機が訪れ、遂には根津家没落となり松子は、経済的には初めて苦境に立たされていた。谷崎は、この路頭に迷う松子に、迷わず手をさしのべ、別居中の丁未子とは、はっきり縁を切り、昭和十年、松子とついに結婚した。

谷崎は、昭和七年に松子夫人を書斎へ呼び想いをうちあけていた。これは、谷崎の死後松子夫人が書いた手記の中からわかったことであるが、それは、沈痛な響きを帯びた掠れた声で「お慕い申しております。どのような犠牲を払っても貴女様を仕合せに致します」と述べたそうである。四十七歳にもなった谷崎が、まるで青春時代

に戻ったように、真剣な表情で、全身全霊をこの言葉に託したという事実には、私は、男性が、夫になり父にもなりながら、いつでも青年の心を蘇らせることができる事を、羨ましくも感じた。

「谷崎の心の中で、現実の松子の姿が、ある時は「盲目物語」の淀君となり、ある時は「芦刈」のお遊さまとなり、ある時は「春琴抄」の春琴となつて、永遠の美しさを持つ女性として描きだされたことを考へるとき、芸術の力の偉大さを思わずにはいられない。」と同時に、生涯かけて女性の美を描き続けてきた谷崎が、遂にこの境地に達したことを考へると、そこへ到達するまでの谷崎の努力とねばり強さとに驚嘆しないものはないだろう——これは、福田清人氏の評論の一部である。

谷崎が、松子と結婚した時、谷崎は五十歳松子は三十歳である。五十にして、彼は、やっと理想の女性を得ることができ、そして、ここから後約三十年にわたる作家生活の第二のスタートをきった。そして、又、長い谷崎の女性遍歴は、終りを告げたのであった。

第三章 「細雪」について

第一節 作品成立の背後

「細雪」が書き始められたのは、昭和十六年であるから、松子との結婚生活も落ち着き、「源氏物語」の現代語訳も刊行を終え、実生活の上でも、作家生活の上でも、共に充実し、円熟味を感じている時期である。しかし、世の中は太平洋戦争が既に始まり、国民の一挙一動にも厳重な監視の目が向けられていた。

とりわけ、文学に関しては、戦争に協力するようなものであればよいが、「細雪」のような、ブルジョア家庭の華麗な風俗絵巻は事

局柄ふさわしくないと判断され、『中央公論』に連載され始めていたのも束の間、刑事によって、掲載を妨害され、隠れて原稿を書き続けた。やがて終戦をむかえ、漸く完成し、出版されたのだが、二十三年の脱稿に至るまでの八年という長い月日をねばり通した、彼の忍耐のたまものと言えよう。

「細雪」が多くの人々に読まれ、支持を得ることになった理由として、福田清人氏は、二つあげている。

ひとつは、谷崎のこれまでの、母性思慕の念や悪魔主義的な面が色濃く投影されていた作品とは違って、ある階級の人間たちの、平均的な生きる姿が、親しみ深い日常性の中で客観的にとらえられていることである。

そして、二つめには、文体があげられている。関西に移って、古典主義に転じた彼は文体や手法までも自由に変えられるようになっていた。「細雪」においては、情景描写を極度に詳細にすることに よって、場面の流れを遅くし、読者の心に深く刻み込む事ができたと 言えよう。

第二節 花は桜—古典美の追求—

「細雪」は、よく昭和における「源氏物語」と言われる。それは、小説の中に、春は花見、夏は螢狩、秋は月見という風に、四季とりどりの遊楽が絵巻物のように展開され、その「宮びやか」な点が、源氏に共通すると見られるからである。

「細雪」と「源氏物語」との比較について、吉田精一氏の分析によると、

(一)描かれている生活雰囲気。ここに描かれている都市生活は、昭和

前期の標準的な「宮びやかさ」であって、それは、源氏における王朝生活の「みやび」と共通する。

(二) 主要人物。どちらも優美な女性中心であり男性が影のうすい点で共通している。

(三) 構成。ゆるやかな話の展開、時には不必要と思われる挿話の続出、それでいて、大きな社会全体を描こうとする手法など、どちらにも共通している。

(四) 表現。複雑にからみあった、息の長い文章、自然と生活とが微妙にまじりあった描写など、共通している。

(五) 女性の描写。女性の性格や肉体の描写については、どちらもすぐれている。

(六) 情緒。「もののあはれ」ともいふべき、高度に洗練された情緒生活活が、どちらにもあらわれている。

(七) 目的。およそ、すぐれた芸術は、全て、それ自体の美が目的なのであって、無用有閑の所産である。

等々の理由から、「細雪」と「源氏」は共通する所が多いと言っている。

また、伊藤整氏は評論の中で、「その構造においては、『細雪』は、『源氏』よりもっと古い、日本の多分最古の物語である『竹取物語』と相似型をなしてゐる。『源氏』は一人の輝やかしい男性を中心として、その周囲を多くの女性が次々と過ぎて行く物語であるが、『竹取』は一人の美女を中心として、何人もの男性が求婚しては失敗し、そこから遠ざかる圓舞のような構造を持っており、それが正に『細雪』における雪子と見合ひする男たちとの関係に似てゐるからである」と言っている。

何故、このように『源氏』や『竹取』に比較される程に、古典的

で、情緒的で落ちついた小説を谷崎が書いたのか、私は考えてみた。あの、悪魔主義といわれ、妖艶なる女に憧憬を感じていた彼の姿は、この小説の中にひとつとして感じさせてはいないのである。

それは、松子夫人を妻として迎えた事により、実生活での理想獲得を成し遂げ、自己満足に到った事も、影響する一つの理由であろうし、前々作の、異常な世界を漂わせる「春琴抄」への反動とも考えられる。また、関西に移住して興味を持ち出した、日本風の美に対する執着心もあるだろうし、偶然、戦争によって執筆期間が長びいた為に、時間のゆとりが、ゆったりとした古典美をいっそう滑らかに熟せしめたとも言えるのではないだろうか。

さて、最初に述べた理由で、実生活上の満足が、この作品に、落ちついた定型の美をもたらしたと言えると云ったが、これについて山本健吉氏は、こう述べている。「もはや求むべきものがなくなつた芸術家の世界がここにあり、私は満ちたりた芸術家の不幸をそこに見たと思つた」。

まさに、作家たるものは、ハングリー精神こそが、作品の根元となるという意見だ。

そして、『源氏』との比較においても、次のように述べている。『細雪』における花見や月見や螢狩などの情景は華麗な大和絵として挿入されているにすぎない。だが、源氏においては月も花も欲楽も哀愁も、時の流れの中に描き出されている。人々の栄華の裏に深い不安と苦悩とがあり、人々は争つて死を急ぎ、出家遁世を願う。

『細雪』に見られる古典美を、一言で言つてしまえば「花は桜」の世界である。その「花は桜」の美しさは、単なる、咲き誇つた明るいイメージの桜の美であつて、百人一首に詠じられるような、は

かなく散りゆく様に、悲しいまでの「美」を感じさせる「桜」ではない……でも言いたいのだろうか。

私は、これは彼の享楽主義からくるものだと思うし、それはそれで、又当時の戦争で地獄のような世界にいた一般庶民が、東の間の平安と、愛国精神に近いものを、この小説に見た事で成功した作品だと思ふ。

彼の追い求めていた「美の極致」が、「花は桜」で言い表わされる日本の古典的な美だけとは思えない。とりあえず、彼はこの作品で、河にたとえるなら、水そのものの美から、「流れる」美を発見できたのであつて、彼の妥協のない追求精神は、まだまだ続いていたのである。

第三節 四姉妹

「細雪」に登場する四姉妹、鶴子、幸子、雪子、妙子は、谷崎の最後の妻、松子夫人の姉妹がモデルとなっている。松子夫人は、前に述べたように、大阪の藤永田造船所の大株主であつた森田安松の娘で、安松には、浅子、松子、信子、重子の四人の娘がいた。松子夫人は、次女にあたり、小説では幸子にあつてゐる。

小説は、幸子は既に幸福な結婚生活に落着き、未婚の妹二人は姉の家に入りびたつてゐるが、次から次へと持ちこまれる雪子の縁談と、次々にスキャンダルを引起す妙子の事件と、それらをうまく取りさばこうとする幸子の苦慮とが物語の大筋をなしている。

その間に、四季の風物として観桜や螢狩や月見などが織りなしてあるのだが、物語の筋骨きとしては、大して特別な事件はなく、多くの評論家が語つてゐるように、一種の風俗小説、すなわち、世間

話なのである。

その世間話の主軸となるのは、三女の雪子と四女の妙子なのであるが、やはり風俗小説と言われるだけあって、誰が主役とは言えず話の中心があちらへ行ったり、こちらに行ったりしている。これを、駒尺喜美氏に言わせると、「三人あるいは四人の姉妹のとりあわせの美を客観的な立場に立って書いている」からだと言うのである。

確かに、谷崎は、事実を詳細に記録するかのようにこの小説を書き、姉妹達の言語動作に対して、何ひとつ主観的なセリフは入っていないように思われる。

それでは「調和の美」を完成させている、四本の軸の一本一本を見ていくことにする。

長女の鶴子は、銀行家の婿養子をとって本家を継ぎ、子供が四人いる。話題の中心には出てこないが、事件の合い間を縫って見せる年のわりに幼い態度が、いかにも、旧家のお嬢さん育ちを漂わせる。そして、大作りの外見から想像される、のんびりとして気の長い性格が、下の三姉妹の気をもませることも度々である。

次女の幸子は、婿養子貞之助をとって、分家し、二人の間には悦子という子供がいる。物語は、この家庭の茶の間が舞台となり、本家を煙たがる後の二人の妹が、様々な話題を運びこんでくるのだが、幸子は、どういうわけか、この休む間もない騒々しさを、快く受けとめている。それは、面倒見が良いことと明朗で派手好きな性格を表している。又一人一倍感受性が強いらしく、風流事に対する反応は敏感で、涙もろい。物語の中で、彼女がナレーターの役をしていることが多い。

三女の雪子は、三十を越しているが、二十四、五歳にしか見えな

い、温和で古風な女性である。しかし、内気で消極的な為、陰気で閉鎖的に見られがちで、三十過ぎてても独身の身でいる。この雪子にもたらされる縁談話が、物語の筋の一本となっている。雪子は、表面上は、古風さを堪えながらも、西洋音楽や洋食を好むという面も持っていたり、行儀がよさそうで、作中、兎の耳を足でさわるなどという場面も登場する。彼女の場合、自分から喋ることはなく、大抵、他の人の会話に受け答えるだけで、話が展開するという特殊な技法を用いている。

四女の妙子は、上の三人とは違って、家が傾きかけた時に育ったこともあって、活動的で自立精神が強く、積極的に手芸や洋裁を身につけ収入を得ようとする。又自由に恋愛をし、墮落の経験もあるという、良家の不良娘である。しかし、姉達に比べ、遙かに優れた理解力を持つ、先駆的な存在となっている。容姿から言っても、考え方生き方からいっても、古風な雪子とは対照的存在である。

以上、この四人の女性、誰一人をとっても谷崎が特別視しているとは思えない。これだけ作者の主張を没し、徹底した客観的態度を貫いても、物語を成し得ているのは、やはり「調和の美」によるものだろうか。ということは、谷崎は『細雪』において、宮びやかな世界を描く事によって「古風の美」を表し、四姉妹によって「調和の美」を表すという、二つの美を織りまぜていたということになる。

すなわち、これらは、そのまま谷崎の理想の女性像にあてはまるのではないだろうか。

だから、彼は、四姉妹のうちでこの人こそが、理想のタイプであるとは、決して言っていないのである。

第四章 谷崎の女性観

これまで、谷崎の生涯を通して、女性との出逢いやかわり方、そして、作品『細雪』に見られる美意識などを見てきたが、どんな時においても、女性の存在と、美意識の存在があった。そのどちらも、男としての彼に大きく影響し、作家としての彼を大きく成長させたのである。成長するごとに、美の追求は物を美化する働きに変わってゆき、彼の理想とする女性像は、多少移り変わりながらも、的を鮮明にしていたのである。

谷崎にとって「女性」とは、「女体の美を持つ物体」であった。その女体を崇拜し、理想化し、美化することで生じる、「快楽」の獲得こそが、「女性」の存在する意義であったのである。

彼の女性観について、三島由紀夫氏は次のように論じている。「谷崎氏は決して、いはゆる女好きの作家ではない。一般的抽象的な女、かつ女一般、女全体は、氏に何ものも夢みさせはしないし、女がただ女なるが故に、氏の幻想を培ふのではない。氏にとっては、女はあくまで、氏の好みに従って美しく、極度に性的関心を喚起しなければならず、そのとき正に、その女をめぐるあらゆるものがフエティッシュな光輝にみちあふれ、そこに浄土を実現するのだ」。

それでは、谷崎にとって、「妻」とは一体何だったのであるか。彼の考える「妻」とは、最高に妻らしい妻ではなく、最高の魅力を供えた「女」でなくてはならなかったと言えるであろう。

最初の夫人、千代子にはそんな面が全く見られなかったので、当然の結果を招き、二人めの丁未子は、初めのうちは、「女」たる存在であったが、若い故に、普通の妻を夢見るのは当然で、そんな平

凡な望みが態度に表れた為に、谷崎を失望落胆させた。

しかし、三人めの松子には、見事に「妻」の裏側に「女」が存在し、それは、理想の「母」につながるものであった。

彼は、彼の母に「母」と「女」を見たように、彼の妻には、「妻」と「女」そして「母」という三役をみようとしたのである。

この彼の理想観は、『源氏物語』の光源氏が、生母桐壺、義母藤壺、ゆかりの妻紫上という三人の女性に抱く想いと似ているように思う。

彼は、「細雪」の中で、雪子の縁談の失敗の数々や、妙子の異常な愛の遍歴などを描くが、これらは、磯田光一氏の言葉で、「女は獲得されないことよってのみ聖なるものである」という、エロチシズム的な、谷崎の女性観をしのばせていると言えよう。

おわりに

「女性観」などと難しい主題を掲げて、始めは、それを通した「美意識」の追求までするつもりだったのが、まとまりのない終り方になってしまつてとても残念である。

しかし、一人の男性の一生を追って、彼の心の内部を分析し、勝手な空想もまじえて、研究を行った過程に、辛くはあったけど、言葉にできない感動を覚えることができた。

私は、谷崎のように、一生理想を貫く生き方はできそうにもないし、彼の言う「妻」にもなれそうにもない。けれど、この経験を大切にし、無駄にしないで、これからの人生を歩んでゆきたいと思う。

そして、私は私なりの「女性観」を築いてゆこうと思う。

参考文献

- | | | |
|------------------|--------------|-------|
| 「谷崎潤一郎」 | 福田 清人 | 清水書院 |
| 「谷崎潤一郎」 | 奥野 健男 | |
| | 山本 健吉 | 学習研究社 |
| 「谷崎潤一郎」(源氏物語) 体験 | 秦 恒平 | 筑摩書房 |
| 「谷崎潤一郎の文学」 | 伊藤 整 | 中央公論社 |
| 「文芸読本谷崎潤一郎」 | | 河出書房 |
| 「谷崎潤一郎研究」 | 荒 正人 | 八木書店 |
| 「日本現代文学全集」 | 谷崎潤一郎集(一)(二) | |
| 「細雪」 | 谷崎 潤一郎 | 新潮文庫 |

〔評〕

- 一、第一章、第二章に相当のスペースが与えられているが、これは第三章に入るまでの用意が周到にととのえられたもので、効果的であったといつてよい。そこから、第三章にも自然に入つてゆくことが出来たことも確かである。
- 二、第三、四章の考察も一々納得のいくものとして、心ひかれて読了した。

三、努力を多としたい。

(清水 文雄)